

口 演

ベトナムの障害児支援の現状

—ハノイ市・ダナン市調査をもとに—

武分 祥子・菱田 博之・川手 弓枝

研究目的

ベトナムの障害児支援において、現地の専門職（教育・保健・医療・福祉）がいかなる支援を行っているかを把握し分析することを目的に、2016年度から研究調査を実施している。今回はその途中経過として成果を報告する。

研究方法

1. 研究期間：2016年4月～2019年3月。
現地調査は2016年11月、2017年3月、2018年3月、11月の各1週間、計4回実施した（最終調査は2019年3月に実施予定）。
2. 調査先・対象：主にベトナムの障害児を支援している学校及びセンター、その職員、通所の子どもと家族等とした。
3. 調査方法：ベトナム語通訳・翻訳者を1名同伴し、日本人調査者2～3名で調査先施設の訪問見学調査、参与観察、ワークショップ、インタビュー（半構成的面接法）、資料収集を実施した。インタビュー内容は日常での留意・工夫点、課題等とした。見学・参与観察中に随時許可を得て写真・動画撮影や録音をしたが、施設の負担にならぬよう心掛けた。得られたデータは逐語録としてまとめ、研究者間で共有・分析した。データは厳重に保管した。
4. 倫理的配慮：飯田女子短期大学研究倫理委員会の承認を得た上で規程に沿って調査した。

ハノイ市の施設調査

ニャンティン障害児学校とサオマイセン

ターには4回、KAZUOセンターには1回訪問した。3施設は民間の施設という点で共通していた。その中でもニャンティン障害児学校とサオマイセンターは、国・自治体支援が及んでいない子どもたちへの支援を実施していた。最近では自閉症や発達障害の支援が課題であり、サオマイセンターの医師を中心に障害の診断、治療、教育を家族も含めて幅広く支援介入していた。ニャンティン障害児学校は前述の医師の助言を受けていた。KAZUOセンターは、日本の修士号を持つベトナム人大学教員が新設したものである。このような新しい施設が最近では増加しており障害児支援は多様化しているといえる。

ダナン市の施設調査

2018年11月にダナン市インクルーシブ発達支援センター、グエンデンチュウ障害児学校、さくらオリンピックバイリンガルスクールを訪問した。前者2つはダナン市が運営するもので同一の敷地内に立地していた。センターはダナン市の障害児支援を統括し、病院と福祉センターをつなぐ重要な役割を担っていた。併設の障害児学校は幼児から高校までの生徒が通学・寄宿して、特別支援及びインクルーシブ教育を受けていた。長年JICAからの人材派遣を受けており、組織的な管理・運営が構築されていた。さくらオリンピックバイリンガルスクールは学校法人の日本式の保育園であり、そこに通うのは平均所得が高めで比較的裕福な家庭の子どもたちであった。現在のベトナムは急速な経済発展を遂げており、さくらオリンピックバイリンガルスクールのような富裕層を対象とした施設も増え、保育内容

も多様化している。社会経済発展による環境の変化から、子どもの成長・発達への影響を多角的に分析する必要がある。

本研究は科学研究費助成事業、基盤研究

(C) 課題番号16K04044, 平成28年度～30年度 研究代表者 武分祥子に基づくものである。

報 告

学校・家庭・地域と連携した歯・口の健康と 口腔機能回復のための啓発活動

— 長野県地域発元気づくり支援金を活用して —

安 富 和 子

【背 景】

加工食品等の食べ物の軟食傾向により、噛まなくても済む食生活の弊害として、子どもたちの顎が小さくなり、不正咬合等の歯並びや歯肉炎等の問題を持つ児童生徒が増加傾向にある。

学校給食においては噛めない、噛まない、飲み込めないと云った食べ方に問題を持つ子どもたちの実態がある。また、最近では高齢者のオーラルフレイル（口腔機能低下）が注目されている。

【目 的】

子どもから高齢者に至る人々の歯・口の健康と口腔機能回復のため、大学が、学校・家庭・地域・関係機関と連携した活動を行うことで、健康寿命延伸に繋げていくことを目的とする。

【方 法】

《子どもたちへの咀嚼啓発活動》

1. 「かみかみリレー」の実施

①平成30年度参加団体は小・中学校7校、保

育園2園であった。（通算40校）

今年度の特徴として児童・生徒のみの参加ではなく、保護者にも参加してもらい、学校が家庭と連携して咀嚼の啓発活動を行った。

②のぼり旗を製作し活動を広めた。

2. 「かみかみ大使カミン」活動

①学校等への参加のみでなく、地域の活動・健康祭り・長野県歯科医師会の活動・日本咀嚼学会学術大会等への参加依頼がありカミンの活動の幅が広まり関係機関との連携ができた。

②カミンのパペット（カミンとカマン）を製作し子どもたちに啓発活動を行った。

③ビックウェーブ（株式会社）の「繋がる」活動に参加し、アルクマとカミンのコラボピンバッジの作製（平成31年3月以降）を行った。

3. 咀嚼啓発食品「カミンこうや」の活動

①第二回「カミンこうや家族でレシピコンテスト」を実施（平成30年10月28日）した。

②第一回「カミンこうやレシピコンテスト」作品集の製作（旭松食品）と学校等へ配布

した。

4. 咀嚼啓発ポスターの作製と配布

- ①咀嚼啓発ポスター（かみかみシリーズ「姿勢教室」「かみかみ教室」「こんな食べ方やめようね」）の作製と、上・下伊那地区の保育園、小学校等へ配布した。

5. 咀嚼啓発紙芝居の貸出し

- ①「かみかみ教室」と「姿勢教室」の紙芝居の貸出しを行った。

6. かみかみセンサーの貸出し

- ①かみかみリレー参加校へ貸出しを行った。
②個人的な希望者に貸出した。
③介護施設への貸出しはできなかった。

《子ども以外の団体への啓発活動》

1. 長野県ACEプロジェクトへの参加

- ①飯田保健福祉課主催のACEフォーラムin南信州（平成30年9月7日）にて「かみかみセンサー」の体験と咀嚼の啓発を行った。
②ACEプロジェクトのロゴをかみかみシリーズポスターに印刷し啓発した。

2. 高齢者への指導

- ①口腔ケアと咀嚼の大切さ、口腔機能低下や誤嚥性肺炎予防のためのトレーニング指導等を公開講座で行った。

【結 果】

平成13年度より（煎り大豆の取り組み・かみかみセンサーの開発等）様々な咀嚼啓発活動を行ってきた結果、県内の子どもたちの咀嚼の知識や意識は少しずつ高まってきた。また、県歯科医師会等の関係機関等との連携もでき、咀嚼に対する意識の啓発も進んできた。

【今後の課題】

今後も地域の大学としてリーダー的な役割を担いながら、学校、家庭、地域、関係機関と連携し、子どもたちの食における問題解決のため、研究と研修の場を設定しながら、活動を地域に広めていく必要がある。また、子どもだけでなく、高齢者のオーラルフレイルにも目を向け、子どもから高齢者の健康寿命延伸に向けた活動をしていくことが必要である。